

『他者の苦痛へのまなざし』(2003) スーザン・ソントグ 第1～3章レジュメ

1

1938年6月 ヴァージニア・ウルフ『三ギニー』戦争を避ける、終わらせることができるのか? p1

- ・男は戦争を起こし、男(のほとんど)は戦争を好む。男にとって戦いには「ある栄光、必然、満足」があるがそのようなものを女(のほとんど)は感じることも楽しむこともない。P2
- ・私とあなたは、同じ写真を見て同じことを感じるでしょうか? p2
- ・戦争は男性のゲームであって殺戮兵器にはジェンダーがあり、それは男性であること、に焦点を当てたところにあった p4
- ・写真は繰り返し立ち現れる。写真は単純化する。写真は扇動する。写真はコンセンサスという幻覚を創りだす。P4-5
- ・弁護士の問い\* どうしたらわれわれが戦争を防止できるとあなたはお考えですか p5
- ・ウルフ\* 「われわれ」ということばを自明のものと考えてることを拒否する・他者の苦痛へのまなざしが主題であるかぎり、「われわれ」ということばは自明のものとして使われてはならない。P5-6
- ・私たちの欠陥は想像力の、感情移入の不足なのです。私たちはこの現実を脳裏にありありと描くことができないのです。P7
- ・現代の生活は写真というメディアをとおして、距離を置いた地点から他の人々の苦痛を眺める機会をふんだんに与え、そうした機会さまざまな仕方で活用される。P12
- ・写真がかきたてる哀れみと嫌悪が、われわれの関心をそらして、どのような写真が、誰の残虐行為が、誰の死が、示されていないのか、を問うのをやめさせてはいけないのだ P13

■ 戦争はまたはじまった。写真の無力さが語られて、写真がいかに共通の体験をもたらしたとしても戦争を防止することはできない■

2

絶え間なく膨れ上がる情報が戦争の苦痛を伝えるとき、それにどう反応すべきか p17

- ・どこかで起きている特定の戦争において人々が苦しんでいるという意識は、構築されたものである p19
- ・写真には、一つの言語しかなく、潜在的にすべての人々に向けられている。P19
- ・起こるたびに映像で伝えられる戦闘や殺戮が、家庭の小さなスクリーン上に絶え間なく流れる娯楽の一要素となっている。P20
- ・戦争を経験したことない人々が戦争を理解するのは、今では主としてそれらの与える衝撃によっている。P20
- ・2001年9月11日 世界貿易センターへの突入の映像—「現実とは思えない」「超現実的」「映画のよう」 p20-21
- ・ノンストップで流れる映像よりも記憶ということにかけて写真のほうが深くくいこむ報

道一部として徴用される映像は、人々の注意を向けさせ、人々を驚愕させることを期待されている p21

- ・写真には二つの矛盾する特質を結びつけるという利点がある p24
  - I：写真には客観性についての保証書が内蔵されている。
  - II：だが写真は必然的に常に視点をもっている。 p24-25
- ・カメラが作り出す映像の証拠としての迫力を強調する人々は、映像製作者の主観性という問題をうまくやりすごさなければならない。 P25
- ・残虐行為の写真にたいして、人々は芸術性に汚染されない証拠の重みを求める。芸術性は、不誠実ないし単なる仕掛けと同一視される。ー広く流布している苦痛のイメージはその点で疑いの目で見られるのだがー安易な同情や同一視を生むことがない、と考えられるのである。 P26
- ・イメージの大量再生産と流布を基盤とするシステムにおいて、目撃という行為は、重要な衝撃的な写真を撮る勇気と熱意で知られる花形目撃者の登場を必要とする。 P31
- ・写真家の意図が写真の意味を決定するのではなく、写真にはそれ自体のキャリアがあつて、その写真を利用する多様な共同体の気まぐれや忠誠心に翻弄されるのである。 P37

### 3

苦しみを容認せず、苦しみに抵抗することは、何を意味するのか？ p38

- ・苦しむ肉体を見たいという欲求は、裸体の写真を見たいという欲求とほとんど同程度に強い。 P39
- ・残酷さの描写は道徳的非難をともなっていない。あなたはこれをみることができますか、という挑戦があるのみ。怯むことなくそのイメージを見ることができ満足があり、怯む喜びがある。 P39
- ・苦痛は美術において正典的テーマだが、それは絵画においてはしばしばスペクタクルとして、他の人々が眺める(あるいは無視する)ものとして描かれている。 P40
- ・戦争の恐怖と、殺意に狂った兵士たちを描いたもつとも優れた作品は、十九世紀初頭のゴヤの作品である。→『戦争の惨禍』 p42
- ・驚くには当たらないが、初期の戦争写真の正典的映像の多くは演出されたもの、あるいは被写体に手を加えて加工されたものである p51
- ・時間とともに、多くの演出された写真は不純さにもかかわらず、歴史的証拠となる。
- ・ヴェトナム戦争以降演出によるものでない p55
- ・戦争の目撃者は今では孤立な冒険者ではない。ドラマティックな報道写真を考案し、カメラのために演出する慣習は、消えゆく芸術への途を辿っているように思われる p56

《コメント》

本のタイトル「他者の苦痛へのまなざし」から対人援助へのまなざしへ繋げようと考えはじめたことが読むうちに、報道倫理・報道リテラシーであり、視覚論であるとする

ならば、皆様がたに討議として委ねたい。

報告者の問いとして

- ① ソンタグのなかにある衝撃的な写真がひとを惹きつける。構築されるものなのか？  
では、「静的」な写真、長く眺めて考えることができるものとはどうなのか？

『ユージン・スミス楽園のあゆみ』—土方正志・長倉洋海 でユージン・スミスは  
\*戦争の写真より人間の内面にふみこんだ写真を撮りたいと思いはじめた p30\*

「ライフ」に掲載されたユージンの記事は次第に戦いそのものでなく、逃げ惑う人の表情や捕虜収容所に収容された民間の暮らしなど戦いの渦中におかれた人間そのものへと移り変わっている。

- ② 「きりとる」ことについて

\* (ソンタグ本文より)

しかし実在の恐怖のクローズアップを見るときは衝撃と同時にうしろめたさがある。たぶんこのような極度の実際の痛みを見る権利があるのは、その痛みを軽減するために何かができる人々—たとえばこの写真が撮られた陸軍病院の外科医たち、またはそれから何かを学べるものたち—だけであろう。その他の者は、自分の意図とはかかわりなく、覗き見をする者である。どちらの場合にも、ぞっとするようなイメージは、われわれを見物人か、あるいは見物のできぬ臆病者かのどちらかにする。P40\*

「きりとる」こと報道することもまた後ろめたさがある。

写真とそれをみる者の間の距離間 本書の結論はもっともらしいことであり現実の苦痛と映像のあいだの苦痛の無限の距離。前回、ALS-Dでの「きりとる」ことへの問いに対して現実との距離。「医療と報道倫理」(2007岡本晃明)「折れない葦」での匿名報道への言及からも事実をどこまで伝え、きりとるのか。—報道リテラシーへの問いがある。そのなかにもさきにメーリングへの水俣病写真家ユージン・スミス氏の封印された内容にもふれてある。

『写真論』スーザン・ソンタグ

\*ライヒによれば—(人々がなぜ苦痛を求めるかについて)つまり彼らはもっと感じるた

めでなくもっと感じないために苦痛を求める p47\*

- アーバスによれば一人間を撮影することは当然ながら「残酷」で「卑劣」なことである、大事なことは、見て見ぬ振りをしないことだ。P49
- アーバスの写真は、人生の恐怖は吐き気を催さず対面できるのだと言う事を実証する機会を提供している。P48

「きりとり」ことへの伝えること・伝えないことの暴力・線引き 伝えるべきことがその上でもあるということ。

#### 参考文献

「ユージン・スミス 楽園へのあゆみ」土方正志・文 長倉洋海・解説 佑学社

「写真論」スーザン・ソントグ 訳 近藤耕人 晶文社

「折れない葦」 京都新聞出版センター

岡本晃明『新聞研究』2007年2月号